



# 駅をつくろう



## 電車開業式 第一話

oerxx

## はじめに

---

日本が、明治になって、開国すると、外国から、いろいろな文明の利器が、入って来ました。

人々の生活も、当然変わって来ました。

交通も、江戸時代は、自分の足で歩くか、せいぜい利用出来るのは、馬か、駕籠でした。

それが、明治になると、陸蒸気 鉄道。

そして馬車に、ヒントを得て、日本人が発明したという、人力車。

時代が下がって来ると、電車、そしてバス。

これらが、人々の生活に、どう入り込んでいったのか、ある温泉町の、来客手段として、どんな利用のされ方を、してきたのかを、書いてみました。

これは、昭和の初めから、第二次大戦直後まで、太平洋岸にある、ある小さな温泉町 湯ノ津と、近くの国鉄の駅を結んでいて、営業していた電車が、今はバスに替わって、しまったという小さな会社の話です。

こんな電車のあってことを、知った小学生が、戦後までこの会社に、勤めていた、古老を訪ねて、教えてもらった話です。

古老は話を始めました。ここの温泉は古くからあり、江戸時代には、旅籠が何軒かあったと、いわれています。

このあたりを、治めていた藩は、徳川幕府から街道を整備するように、命令され、街道を整備したこともあって、温泉に来るお客さんが増え、温泉のある宿場町として、大変栄えたということでした。

参勤交代の諸大名を初め、街道を行き交う、商人や旅人はどうせ泊まるなら、温泉があるところがいいと言って、この町に泊まったということです。

それが明治になって、藩がなくなり参勤交代が無くなると、大名が主なお客さんだった、本陣などは客が減ってしまったんだ。

世の中が落ち着いてくると、政府は、国内に鉄道を、敷くことを始めたんだ。まず、最初に東西の大都会、東京と大阪を、鉄道で結ぶことだったんだ。それも出来るだけ早く、線路を敷いて、汽車を走らせたかったんだ。

だが政府には、金銭的に余裕も無かったんで、地図を見れば解るけれど、出来る限り真直ぐに線路を、敷くことにしたんだ。

その計画は、この温泉町は素通りし、人も住んでいないの、ところが線路の予定地になってしまい、駅は造っても意味がないので、造らないという、計画が出来上がってしまったいたんだ。この話はここを定宿にしている、行商人達から聞いたんだと思うよ。

それを聞いて町の人達は驚いた。そんなことになったら、いまでも減り続け居るお客さんが、ますます減ってしまうと。

そこで、旅館の亭主達は、集まって相談し、東京へ行って政府に、昔からある街道に沿って、線路を敷き、線路をこの温泉町を通すこと、これが駄目なら、線路は計画通りでもよいから、せめてこの町に近いところに、お客さんが乗り降りができる駅を、造って欲しいと考えたんだ。

だがどうやって、このことを政府に話したら、よいのかその方法が、なかなか考え付かなかったんだ。

まだ国会議員などがない時代なので、亭主達は相談の結果、何人かの代表を選んで、東京の政府に、頼みに行くことに、決め、嘆願書を書き、路銀や旅籠代を出し合い、陳情団を東京へ送りました。

陳情団の、団長には伊勢屋の親父、仲田さんが選ばれて、あとは各旅館の番頭が四人と、荷物持ちで、若いもんが、二人付いて行ったんだが、鉄道はまだ、横浜から、西には来てないので、江戸時代と同じに、歩いて箱根の山を越えて行ったんだ。

東京に着いた町の代表者達は、鉄道を担当する役所に近いところで、なるべく安い旅籠を、町の人に聞いたり、教えてもらったりして、そこに腰を落ち着けました。

そのころ鉄道は、工部省が担当していました。その後鉄道を担当する、役所の名前はいろいろと変わり、最後に鉄道省に、落ち着きました。それで、これからは、鉄道省と書きます。

陳情団の団長、仲田は旅籠の、番頭を呼んで、鉄道省のあるところを、教えてもらい、みんなを連れて見に行きました。今まで見たこともない、立派な建物でした。

「オイ、あの中に入って行くのかい。 こんな姿で、入って行って怒鳴られないかい。」今着ている着物は、長旅で、汗と埃にまみれていました。仲田は、

「だから、紋付の羽織と袴を持って来たんだろ。明日はそれを着て、みんなで行こうや。今日は、長旅で、疲れているから、早く寝ようや。恐らく明日一日では、片付かないと、思うが。」といい、みんなは、旅籠に戻りました。

翌朝一行は、紋付羽織袴で、揃って鉄道省へ出掛けました。

頭を下げながら、門を入れて行くと、早速守衛に呼び止められました。

「オイ、どこへ行くんだ。」守衛の一人黒田が声をかけたので、陳情団を引連れて来た仲田は、

「私共は決して怪しい物ではありません。温泉で有名な、湯ノ津という町から来ました。今度政府で、手前共が住んでいる、湯ノ津の近くを通る鉄道を、敷くことになったそうですが、ぜひとも、手前共の町に通して、いただきたいと、考えて、お願いにまいりました。」

「みなさんは担当官殿と、面会する約束を、しているのかい。」といわれて、

「いや、ありません。今日初めて来たもんですから。」

「そりゃ、無理だな。担当官殿を、見知っている人に頼んで、担当官殿の都合を、聞いてから、おいで下さい。」

「手前共は、そういうお方を存知あげないので、なんとか御都合を、聞いてただけないでしょうか？今日でなくても、明日でも、明後日でも結構ですから。」

「では、ここで待っている。尋ねて来るから、他の人の邪魔に、ならないように。」

「よろしく、お願いいたします。」守衛はこれを、後ろで聞きながら、建物の中へ入って行きました。

温泉町の一行は、建物の脇で、守衛の帰りを待つことしました。建物に入って行く人、建物から出て来る人、町を歩いている人、みんなハイカラで、他所の国に来たようでした。

「なんだ、簡単じゃないか、会って嘆願書を渡して、わかったという返事を聞いたら、これで終わり、明日は、東京見物だな。」

「何をのんきなことを、言ってるんだ。まだ、会ってもらって無いじゃないか、今日はだめだといわれたら、明日また、来なけりゃならないんだから。」

だいぶ待たされ、帰って来た守衛は、彼等呼んで、

「今日は、駄目だそうだ。持ってきた、嘆願書は見ておくそうだから、預るようにいわれたんだが。」

「明日は、どうですか。」と、仲田がいうと、

「明日も、駄目だそうだ。嘆願書を、渡してくれないか、」

「それは、困ります。お会いして、手前共の事情を、お話した上で、お渡しします。今日はこれで帰ります。大変お世話になり、有難うございました。」と言って、連れてきたみんなに、

「さあ、また明日出直した。」と、役所を後にして、旅籠の戻りました。

戻ってくると、みんなを集めて、

「まだ、鉄道の係が、あの建物の、どこにあるのか、係りの役人は、どんな顔をしているのか、俺達は何も知らないんだ。それで、また夕方役所に、行くから、そのつもりでいるように。」と言いました。

夕方になると、一同揃ってまた出掛けました。役所に着くと、仲田は守衛の黒田のそばに行きました。これに気が付いて黒田は、

「何だ。また来たのか。今日も、明日も駄目だと、言ったのに、何しに来たんだい。」

「今朝ほどは、有難うございました。手前共の、話を聞いていただき、係りのお方を、陰ながら教えていただきたくて、やって来ました、決して御無礼なことは、いたしませんから、教えていただきたいと思って、やって来ました。」

「そうか、それなら、邪魔にならないところで、待っている、お出でになったら、教えるから。」

」いいました。

戻って来た、仲田は、みんなに向かって、

「聞いたろ。顔お覚えておけば、会ったときに、初対面より、気持ちが楽になるだろ。よく頭の中に入れておくように、そこで待っていよう。」と、入口の脇で待つことにしました。

しばらくすると、終業時間になって、奥から大勢出て来ました。いつのまにか、仲田のそばに来た守衛は、

「あのお方だ。鉄道の新線の係りは。」と、前に行く、背の高い中年の、髭をはやした、男の背を、指差しました。仲田は、守衛に、

「ありがとうございました。」と、礼をいい、歩き始めました。他の者は慌ててやって来ると、皆に向かって、

「あの役人の、顔をしっかり覚えてかい。後ろに付いて行って、住まいをつきとめようや。」と、後をついて歩き始めました。ところが、その役人は、人力車を呼ぶと、それに乗って行ってしまいました。

他の者が、なぜ、あとをつけようかをするのか、不審に思って、尋ねると、仲田は、

「もし、役所で、会ってくれななかったら、家に押し掛けるつもりだから、住まいを、知っておこうと思って、人力車じゃ追いかけれないから、今日は諦めるが、明日若いもん二人は、夕方人力車を、おっかけるて、家突きとめて来い。会わずに、そのまま帰って来ていいから、帰りは迷子にならないように、旅籠の、所番地を、番頭さんによく聞いておくように。」と、荷物持ちで連れて来た。二人の若者に言いました。

翌朝、若いもん二人は、夕方来ればいいと言って、二人は残して、他の者は、また役所に行きました。守衛は、彼等の、顔を見ると、

「昨日言っただろ。今日は駄目だって。」と、いわれ、年長者が、

「別に、部屋の中でなくても、お出かけになるとき、ここで、手前共の、話を聞いて下さればよろしいのです。立ち話でも、差し支えありませんから。ここで待たせてもらいます。決して御迷惑を、お掛けするような、ことはいたしませんから、ここで待たせて下さい。」と、言われて守衛は、

「ここじゃ、駄目だ。今日お出かけにるか、どうかわからんぞ。いつまでもここにいると、こっ

ちが困るから、外へ出て道にたっているぶんには、やむおえないな。」と、ていよく、追い出されてしまいました。

数人の大の男が、紋付羽織袴の正装で、表の道路に立ち、建物の中を覗いたり、通る人を眺めているというのは、チョット異様な光景でした。

気になったのか、しばらくすると、守衛がやって来て、今日は無理なこと。人目もあるので、立ち去るように、いいました。年長者は、

「解りました。」と言って、皆を連れて、歩き始めました。角を曲がると、仲田はすぐに、足を止めて、みんなにいいました。



「二組みに分けようや、みんな担当の役人の、顔は、覚えているだろ。まず最初の組は、さっきのところまで行って、もし担当官が出てきたら、声を掛け足を止めさせ、嘆願書を渡して、話をしようや。」

担当官が出て来る前に、守衛がやって来て、さっきのように、立ち去るように言ったら、素直に謝って、その場を離れて、守衛の目が見つからない、このあたりまで戻って来いよ。そして見張っているよ。そして、もう一組は、あの辺りまで出て行き、やはり見張っているよ。くたびれたら交代して、役所の門を見張っていようや。」と、仲田に言われて、第一班は出掛けて行きました。

しばらくすると、守衛は気が付き、苦情を言ってきます。彼等は、素直に謝り、立ち去りました。第一班が追われると、第二班が行き、こんなことを、夕方まで繰り返していました。

夕方になると、旅籠に残した若いもん二人がやって来て、彼等、二人は言われたように、鉄道省の役人が乗った人力車の後ろを、追いかけて行きました。

他の者は、旅籠に戻り、一風呂浴びて、食事を始めるころ、人力車を、追いかけて行った、若いもんは、帰って来ました。

「ただいま、戻りました。」早速、仲田は、

「御苦労さん、解ったかい。」

「ハイ、解りました。」

「じゃ明日の朝、俺を連れってくれないか。」

「解りました。」

「他のもんは、今日とおんなじ、守衛とは、喧嘩しないようにして、もし役官が出て来たら、嘆願書を渡して、話をするように。」と言って、

「後は、明日。」と言って、また風呂へ行ってしまいました。

次の日、仲田は、若いもんに連れられ、鉄道の新線建設の担当の役人の、家を見に行きました。

役所へ戻って来ると、陳情団は、昨日と同じで、守衛と、鬼ごっこをしていました。

仲田が、先に行かせた仲間々に聞くと、守衛から、担当官がいつ会って、くれるのか、その返事を、まだ貰ってないということでした。

翌日、東京へ来て三日目、また正装して、みんなで役所の前間で来て、仲田だけが中に入り、他の者は、外で待っていました。守衛のところへ行くと、仲田の顔を見た守衛は、すぐに、「今日も駄目だぞ。担当官殿は、お忙しいんだから。」と、こちらがなにも、言わないうちに、追い出そうとしました。

「解りました。外で待っていますから、御都合がいたら、いつでも、お声をかけて下さい。」と、素直に外へ出て来ました。

三日も続いて、紋付羽織袴で正装した、大の男が数人、鉄道省の前に、朝から晩までいて、守衛に何かいわれると、すぐになくなるが、またすぐに、どこからか、現われてくる。あの人達は、いったい何者なんだろう。一日中なにもしないで、あそこにいるんだが、どこから来たんだろう。そんなことを、通る人が考えるように、なりました。

それを、どこで、誰から聞いたのか、その日の、午後新聞記者がやって来ました。

仲田は、新聞記者の吉岡に問われるままに、湯ノ津という温泉町から来たこと、明治維新になって、参勤交代が無くなると、客足が減り、町が寂れそうになってきていること、政府が、鉄道を敷くそうになったので、是非の鉄道を、自分達の、温泉町を通ってもらいたいと、鉄道省に頼みに来たこと、だが、今日で三日目になるが、担当の役人が会ってくれないこと、などを話しました。

聞いていた、吉岡は、

「ここで、待っていてくれ。都合を聞いてくるから、」とあって、省内に入っ行きました。守衛は、吉岡に何も言いませんでした。

それを見て、陳情団は、ビックリしました。しばらくして、出て来た吉岡は、

「明日は、駄目だそうだ。明後日なら、午前十時に会うそうだから。十時までに、来てくれ、このなかは私が案内するから。明日は、折角来たんだから、東京見物でもしたら。」とあって、去って行きました。

陳情団の一行は、その後ろ姿を、あっけにとられて、眺めていました。仲田は、我に返ると、みんなにいいました。

「今日は帰ろうや。」役人に、会えるかどうか、わからなかったのが、話が簡単に決まってしまったので、いままでの、心配事が急に無くなり、気が抜けてしまいました。

第四日、仲田は、朝食を食べ終わると、みんなに、

「今日も、役所の前までいってみようか、」と、いったので、それを聞いた他の者が、

「エッ、明日じゃないんですか。」

「あの新聞記者と、一緒に、役人に会うのは明日だが、もし今日会うことが、出来れば人様に、迷惑かけずに、済むからな。」

「なるほど。じゃあ、今日も行ってみますか。」

陳情団の一行が、役所の前まで来て門の外から、中をのぞいていると、彼等の廻りを、何人かの人達が、取り囲みました。この人たちは、みんな新聞を持っていました。その中の一人が、手に持った新聞を差し出しながら、

「あんた方かい、この新聞にのっている、湯ノ津という温泉町から、鉄道のこと、ここの役所に、頼みに来たのは、だけど、役人が会ってくれないので、役所に、日参している人達っていうのは。」と、尋ねられ、仲田が代表して、

「ハイ、手前共ですが。」と、答えると、その男は、大きな声で、廻りにいる人達にむかって

「この人達だよ。この新聞に書いてある人達はだよ。」と、言いました。仲田は、その男に、

「すいませんが、チョットその新聞を、見せていただけませんか。」と、新聞を貸してもらい、読んでみると、新聞記者の吉岡に昨日話したことが、そのまま書いてありました。そして新聞の最後に、こんなことが、

「遠くから来たのに、何日も会わずに、門の前で待たせるのは、チョット、ひどいんじゃないんだらうか、五分もあれば、済むことなのに。」と、書いてありました。

彼等を取り巻いた群衆は、口ぐちに、

「遠いところ、大変だね。」とか、

「会ってやれば、いいのにな。」とか、いいって、一行は取巻かれ、あたりは賑やかになってきました。

それに、気が付いた守衛が、門の外へ出て来て、

「また、あんた方かい、いい加減にしろよ。明日会ってもらえるんだろ。今日は、東京見物でもしたら。」と、言われて、仲田が、

「お騒がせしてすいません。こんな騒ぎになるとは、思っていませんでしたので、すぐ帰ります。」といい、取巻いている、群衆に向かって、

「みなさん、御心配下さいまして、有難うございます。この新聞の記者さんが、明日、私達を、お役所のお方に、合わせて下さることに、なっています。私達は、今日はこれで帰りますから。」  
という、群衆のなかから、

「うまくいくといいな。がんばれよ。」と、いわれました。

彼等は、いままで、こんなに多大勢の人に囲まれて、ワイワイ言われたことなど、なかったので、すっかり疲れてしまい、フラフラしながら、旅籠に戻り、横になってしまいました。

翌朝、一同が出掛けようとする、番頭が、

「まだ、早いですよ。お役所へいらしても、まだどなたも、いらしてないですよ。」と、いわれましたが、

「遅れたら東京へ来た、いみがなくなるから、早いぶんには、これに、こしたことがなから。」と、いい出掛けました。

役所に来る途中もまだ、町は静かでした。役所の中も静かでした。近くで腰を下ろすと、居眠りをする者も、出て来ました。

声を掛けられ、気が付くと、吉岡がそこに、立っていました。一同が、

「お早うございます。」といい、仲田が、

「今日は、お世話になります。なにとぞよろしく、お願いいたします。」という、吉岡は、

「私が、担当の役人のところまで、一緒に行き、引き合わせるから、あとは、あなた方が話をして、下さい。それと大勢で、行くより小人数のほうがよいから、三人ばかり私に付いて来て、下さい。」と、歩いて、歩き始めました。

仲田は、二人連れて、その後に付いて行きました。

守衛の前を通ったとき、三人は頭を下げましたが、守衛は何もいいませんでした。

応接室に、連れて行かれた三人は、部屋の隅に立っていました。

吉岡が、担当官を連れてくると、担当官は、

「あなた方のことは、守衛から聞いております。また御用の詳しいことは、この新聞で解りました。御期待に添えるような、御返事はいま致しかねます。この鉄道はすぐにでも、工事に取掛

からなければ、ならないので、早急に結論を出して、御返事いたします。」と、温泉町の三人が、何もいわないうちに、返事を貰ってしまいました。仲田が、嘆願書を渡して、

「よろしく、お願いします。」というだけが、やっとでした。

吉岡に連れられ、外へ出ると、吉岡は、

「あなた方の近くを、通る鉄道の、着工は予定では、もうすぐのはずだ、だから返事はそんなに、遅くはないと、思うが、返事が出るまで、東京にいるわけには、いかないだろうから、一旦帰って、返事が出たら、連絡するから、そのときにまた、東京にいらっしゃい。」と言いました。仲田は、吉岡に向かって、

「私は、お役人の前へ出たら、緊張して口がきけるかどうか、心配でした。そしたら、あなたが書いて下さった、新聞を、お役人はすでに、読んでいらして、私は一言も、しゃべらないで済みました。それに、昨日ここへ来たときには、町の人も、新聞を読んでいたもので、私達のことを、知っていたんですよ。新聞というものは、たいしたものですね。」

吉岡は、笑って、

「新聞はたった一枚の紙だけれど、力があるでしょ。あれだけの人を、動かし、あれだけのことを、話してくれる。」

それを、聞いて一同は、うなずき、吉岡に礼をいい、旅籠に戻り、自分達の温泉町に帰りました。

一ヶ月たったころ、鉄道省から、返事が来ました。それによると、

「湯ノ津を、通すことにすると、遠回りになるので、これはできない。駅を作るのにも、そちらが、希望しているあたりは、人口が希薄で、駅を開設しても、利用者が、わずかではないかと、思われる、それで今回は、見送ることにした。」と、いう内容でした。

当初はすべて、予定通りということでした。

さらに、もしどうしても、駅が欲しいならば、鉄道が必要とする土地を寄付し、駅を造るのに必要なお金は、地元で負担すること、そして駅が開業後赤字が出たら、相談に乗って欲しいとも、書いてありました。

これに、応じるためには、この温泉町だけでは、負担できませんでした。とって、近隣は小さな農村が、点々とあるだけでした。力を借りるところも、相談するところも、ありませんでした。

ここ温泉町も涙を呑んで諦め、来客の減少を食い止めることは、できませんでした。

鉄道が開通すると、遠くに出来た、それでも一番近い駅から、人力車でお客さんを、送り迎えし、各旅館は細々と商売をしていました。

だが数年後、明治の末になると、あの吉岡から、思わぬ情報が飛び込んできました。彼は約束を忘れて、いませんでした。

それは、日清、日露の戦いで、勝利した、陸軍がさらに強い軍隊を造るために、連兵場を捜していた。その候補地の一つとして、この温泉町と、線路を挟んで反対側の原野が候補に上がりました。

もし、練兵場になれば、兵隊や馬、武器、弾薬などを、汽車で運んで来て、それらを、汽車から降ろしたり、乗せたりする、駅が必要になるので、陸軍省は、鉄道省に要求しているということでした。

温泉町はなにもしなくても、近くに駅が出来るという、話でした。

そのことを、あの新聞記者 吉岡が知らせてきたのでした。

あれから、二十年以上もたち、あのときの、若いもんが町の有力者になっていました。

今度は彼等が数人引き連れ、汽車に乗って、早速上京しました。知らせて来た吉岡は、喜んで彼等を迎え早速、連絡を貰って、準備が出来ているからと言って、陸軍省に連れて行き、陸軍省の担当者と会うと、担当者は、彼等にはこう説明しました。

「練兵場としては、あなた達の温泉町 湯ノ津とは、線路を挟んで少し行ったところにある原野が、いま候補地として最も有力である。もしここに決まれば、鉄道の線路はあるが駅がない。それで、兵隊や馬が乗り降りするときや、武器、弾薬などは、貨車に積んで来て、それらを、積み卸しする駅が欲しいのだ。その駅の設備は、汽車を止めることができ、乗り降りや、積み降ろしが出来る程度のもので、いいんだ。」といい、さらに続けて、

「鉄道省には、我が方がまだ、正式決定ではないのだが、内々で話はしてある。」と、いうことでした。

これは地元の住民の利用を、全く考えていないものでした。それでも、湯ノ津の、近くに駅が出来る可能性が、少し出て来ていました。一行は吉岡に連れられて外へ出ると。吉岡は、

「実際に駅を造るのは、鉄道省だから、どこまで考えているのか、行って聞いてみようじゃ、ありませんか。」と、いって、一行を、鉄道省の前まで連れて行って、



「陸軍省は内々と言っていたから、大勢でゾロゾロ行くと、鉄道省は、教えてくれないかもしれない。それで私が一人で行って聞いてくるから、ここで待ってて下さい。」と、言って、一行を門の外に待たせて、中へ入って行きました。

言われたように、しばらく外で待っていると、吉岡は出てきて、

「陸軍省の話は知っていたよ。鉄道省では、別の意味であの辺りに、上りと下りの汽車の行き違いをする、信号場を造ることを考えているようだよ。あのあたりは、ずうっと単線で駅の間も長いので、汽車をこれ以上走らせたくても、走れせられない、状態になってきそうだ。

それで、あの辺りに、信号場を造れば、走る汽車を増やすことが出来るのでと、そこまでは考えているようだ。だがこちらも、地元の住民の利用は、考えていないんだよ。」と、話してくれました。

この前上京したときは、若いもんだが、今度は代表者はとなって、何人か連れて上京して来たきた、西村は吉岡を誘って、

「昼になったから、その辺で飯でも食いながら、相談にのっていただけませんか。手前共は、お上りさんなので、何にも解りませんから、おいしいところを、教えていただけませんか。」といい、一行を引き連れ、昼食を食べに行きました。食事をしながら、西村は、吉岡に向かって、

「今日は、有難うございました。お役所で教えていただいた、話をまとめると、自分達に都合のいい解釈かも知れませんが、駅の汽車を止める、動かす設備は、鉄道省で造る、人や、荷物を、乗せたり降ろしたりする設備は、陸軍省で造ると、考えてもよいみたいですね。」

「ウン、そう取ってもよさそうだな。」

「それだけで、私たち地元の者が、利用できるならば、私達は何も負担しなくて、済むわけですね。」

「それは、理屈だね。本当に駅が欲しいなら、何らかの形で協力したほうが、いいんじゃないだろうか。」

例えば、駅を造るのには、土地が必要だ。彼等が、いまその土地は持っていないはずだ。そこで、彼等が必要とする土地をまとめて、土地を寄付でなく、安く提供出来るように、地主を説得するとかして、協力したほうが、いいんじゃないかな。

「いますぐに、ここで決めるのは出来ないだろうから、湯ノ津に帰って相談したら。」

「やはりまず必要なのは、土地ですね。いまは線路が一本だけですが、行き違いをするとなると、線路がもう一本必要になりますね。さらにその外側には、人や荷物を汽車に乗せたり、降ろしたりするホームが、必要ですね。

そして、鉄道の職員が、仕事をしたり、寝たりする建物も、いりますね。土地はどのくらいあったら、いいんでしょうかね。いまは、いえませんが、土地については、帰って相談してみます。その結果をまた連絡します。」と、吉岡にいうと、吉岡は、

「これから、この話がどうなるのか、また調べて連絡するから。」と、両者は別れました

。

この話を持ち帰った、西村はみんなと相談しました。

乗客は兵隊だけでなく、誰でも利用できて、毎日全部の汽車が止まることを、条件に、駅を造ってもらうのには、地元も協力するという、意味でも駅を造るのに必要な、土地を寄付することにすれば、早く確実に駅が出来ると、相談を受けた人達も思ったのでした。

だがどれだけの広さで、どんな形で必要なのか、全く解りませんでした。

早速、吉岡に手紙でその話を伝えると、折返し吉岡から、図面が送られてきましたが、それは絵に近く、詳しいことは解りませんでした。それを参考に、関係する地主に話をすると、手放しともよいと、その値段もいってくれました。

駅設置の費用は、鉄道省と陸軍省が負担し、これについては、地元の負担がないようなので、この機会を、逃がすまいという、気持ちも働いて、土地の話を進めることにしました。

まず、正式に温泉旅館組合を作り、地主から土地を買い上げ、組合の名で、鉄道省に寄付することにしました。

このころになると、線路の反対側も、住民が増えていて別の村ができていました。

明治になってから、新しく出来た村で、名主の名前から、山本新田と呼ばれていました

ここは水の便が悪く、米はあまりとれず、雑穀とか、野菜ぐらいでした。

そこへ大勢の兵隊が来れば、地元は、米味噌の需要くらいはあるだろうから、農業を止めて、兵隊相手の、商店でもやったほうが、暮らしが楽になるだろうと、考える人も出て来ました。

練兵場が、近くに出来ることは、自分達にとっても、生活がよくなるので、いいことかもしれない。という意見も出ました。

もともと役に立たない土地でしたが、その土地を、陸軍省に売ることによって金になること、そして兵隊が大勢来ることで、やり方によっては、引き続いて金が落ちるだろうからと、そんな思惑もあって、線路の反対側の村 山本新田も、駅の誘致運動に加わることになりました。これで、駅が出来ると反対意見は出ないようなので、鉄道省は駅を造ってくれるだろう、と確信を持つことが出来ました。

次に駅を線路の、どちら側に造るかということになりました。

湯ノ津温泉旅館組合では、山本新田の村長に、どちらにしたらよいか、意見を聞いたところ、「自分達の、村では汽車に乗って出掛けるような、人はいないから、湯ノ津の方でもよい、ということでした。ただ農作物を、出荷するときは、自分達の側から、積むことができるように、してもらえれば、有難い。」と、いってきました。

農作物のことは、陸軍省の考えと、同じなので、この注文は、可能でした。

それで、駅の建物を、湯ノ津では、自分達の側に、造ってもらうことに決めました。以前送ってもらった図面では、あやふやな所もあるので、駅を造るのには どれだけの土地が、線路に対してどの位の範囲で必要なのかを、吉岡を通じて鉄道省に尋ねました。

ほどなく、詳しいことが、決まると、吉岡から連絡があり、西村は、何人かを連れて上京しました。鉄道省は、彼等に、図面を見せながら、

「まず土地については、駅を造って、全列車を止め、お客さんに乗り降りしてもらう、設備を造るとなると、この程度は必要になると思います。実際にどこにするかと、いうことは、後日工事事務所の者を、行かせますから、そのときにハッキリ決めますから。

次に費用のことですが、汽車行き違いのために、もう一本線路を敷く費用は当然鉄道省で、負担します。ただ鉄道省では、それだけのことだけ、考えていたので、陸軍省からいっている、地元の方や兵隊さん達を含めた、汽車から乗り降りする人達、汽車に積も降ろしをする貨物を、扱う設備それらの仕事、またそれに携わる職員の仕事室とか、寝室などは、考えていませんでした。

従って、これらの費用については、陸軍省と話あって応分の御負担をして、いただけないものでしょうか。」と、言われた。

町へ、帰って来た西村たちは、山本新田の代表者も呼んで、協議しました。そして決まったことは、

「将来を考えて、土地はできるだけ広く確保して、これを寄付すること。

駅の建物は、小さくてもよい、汽車から乗り降りするホームには、待合室はおろか、屋根もない。ホームの幅も、兵隊が、大勢乗り降りしても、支障がない程度でいい、貨物を積み降ろしする設備も、陸軍省が望む程度でよい。」ということでした。

西村は、この話を持って、また上京し、鉄道省へ行きました。

しばらくして、工事事務所から、調査に来て、そのとき一緒に陸軍省の返事を書いた書類を、持って来ました。それには、

「兵隊が、乗り降りするときは、他の乗客はホームは、おろか、駅の立ち入りを、禁止する。また、馬や、武器弾薬など、積み卸しをしているときは、やはり他の荷貨物は、駅構内に、搬入は禁止する。」と、書いてありました。そして、

「だが陸軍が、使っていないときは、自由に使ってもよい。」ということでした。これは、陸軍の使用が、年間たった数日というなら、有難い話です。が一方、軍隊の行動は、軍事機密で、事前に知らされることは、ありません。ある日突然いまから、駄目だということも、有り得るのですから。

鉄道省の工事事務所の数人の役人は、線路の周りの畑や、野原を走りまわり、縄を張り、頭が赤く塗られた杭を、あちこちに打っていきました。それを見て居た、湯ノ津の人達は、目を丸くして、ささやいていました。

「あんな、遠くまで行ったぜ、あんな所までいるのかな。」

「ほんとだ、余計なものまで、造ってその金まで、請求するんじゃ、ないだろうな。」

土地だけでなく、駅の建物にかかった費用も、一部負担させられるかも、しれないので。

その作業も、夕方おわり、何ヶ所か、上から下まで、真っ赤に塗られた杭が、打たれました。

工事事務所の、役人は、見て居た湯ノ津の人達を、呼んで、

「この、上から下まで、全部赤く塗った杭の、範囲が鉄道にとっては、必要な土地です。広すぎると、お思いでしょうが、将来のことを、考えますと、まだ狭い位です。御無理な、お願いとは、思いますが、よろしくお願いたします。」と言われてしまいました。

ここで、もし、

「そんなに、いらないだろう、」などと、いったら、鉄道省と、陸軍省だけの、都合のいい駅が出来てしまい。湯ノ津は、いままでのままで、発展は望めません。無理を、承知で、うなずくより、仕方がなかったのです。

湯ノ津温泉旅館組合では、鉄道省が欲しいとやってきた土地が、予想より広く、寄付で集めたお金では、足りなくなってしまい、どうするか、協議しましたがなかなか、結論は出ませんでした。その方法として、地主を説得して、地代を安くしてもらうこと、土地を手放すことによって、生活ができなくなるようなら、他の仕事を斡旋すること位しか出来ませんでした。

いまなら、駅ができれば、駅を利用する人達を相手にした商売ができるので、駅前に店を出して、それで生活ができるようになりますが、その頃は、地元の人が、駅から汽車に乗って、出掛けることなど、ありませんでしたかから、そんなことは、考えつきませんでした。

やがて駅は出来上がりました。お客さんが乗り降りするホームが、上りと下りで二つ、貨物の線路は別に出来ました。

お客さんが通る建物は望みとおりに、湯ノ津側に出来ました。練兵場側 山本新田側は、兵隊さんが、来たときだけ使う出入口もできました。

鉄道省では、駅が出来ても開業式など、華やかなことは一切しないと、いうので、開業日の数日前、湯ノ津温泉旅館組合では、鉄道省や、陸軍省の関係者を、招待して、内祝をしました。

最初から世話になった、新聞記者の吉岡にも招待状を、送りました。

彼は、健康がすぐれないとあって、祝の品だけを送って来ました。

旅館組合の人達も含めて、湯ノ津の人達が最も喜んだのは、この新しく出来た駅の名前が、『湯ノ津』に、決まったことでした。日本全国の駅に貼ってある、鉄道地図に、『湯ノ津』の名前が載るんですから。

鉄道省では、駅のある土地の、町村名または字で、いま全国にある駅の名前と、同じでなければ、よいという決めがありました。『湯ノ津』がそれに合格したのです。

そして、時代は大正になりました。

駅は出来ましたが、湯ノ津のお客さんは、サッパリ増えませんでした。江戸時代からある、古い温泉町湯ノ津が、もう三十年近くたつと、人々から忘れられて、しまったようでした。昔のように遠くからでも、歩いてくるお客さんは、汽車という便利な、乗り物が出現したので、もっと先まで行ってしまい、お伊勢参りの講中などは、素通りしてしまったのです。

ここ、湯ノ津は、江戸時代から、目的地ではなくて、通り道だったのです。

それでも、一日に何本か停まる汽車から降りて来る、お客さんの中には、湯ノ津の温泉が目的で、やって来る人達もいました。

その人達を目当てに、大きな旅館は各々で、小さな旅館は、何軒か組んで人力車を雇い、駅まで一里半(約六キロ)の道は、送り迎えをしていましたが。汽車が停まっても、降りてくるお客さんの多くは、駅が出来て、練兵場の工事が本格的になったので、その関係者ばかりでした。

組合では、長い時間をかけて駅が出来たので、これで一安心と、思っていたのに、いっこうにお客さんが増えないのです。どうしたものかと、江戸時代の宿帳を調べてみると、主なお客さんは、参勤交代の大名行列でした。

それが年に数回あったので、これで温泉町は潤っていたのです。いま汽車が運んで来るであろうと、期待している、東京のお客さんは、その当時江戸とっていましたが、お伊勢参りの講

中が主でした。その人数も、大名行列に比べると、僅かなものでした。

藩も大名もなくなったいま、東京の人達がお客さんとして、来てもらうしかないということになりました。



組合では、東京に行って講中の旦那方に頼んで、お伊勢参りの、途中江戸時代と同じように、立ち寄ってもらうようにして貰いました。

また、旦那方の紹介で来てくれた、お客さんと、紹介してくれた旦那方には、それなりのお礼をしようと、決めました。

これは、それぞれの旅館が、それぞれの講中のいわばいまでいう、指定みたいになっていたもので、組合ではなく、それぞれの旅館で方法を、考えることになりました。

その他に、山本新田の、まだ工事中の練兵場へ行って、そこで工事をしている人達が、休みのときにきてもらうように、働きかけた、旅館もありました。また、駅前から人力車で来たお客さんは、その代金を安くしてた、というところもありました。そんな努力が実って、湯ノ津に来るお客さんは、すこしずつ増えてきました。

ところがあるとき、湯ノ津駅の駅前でとんでもない事件が起きてしまいました。それは、人力車の車夫同士が、喧嘩をして、双方とも、大怪我をしてしまい、その仲裁に警察官まで出てきました。当時車夫は、それぞれの旅館で雇っていたので、それぞれの旅館の名前を染めた、法被を着ていました。

駅に汽車が着いて、改札口から、客が出て来ると、車夫達がお客さん達を、取り囲んで、口々に自分の雇われている、旅館の名前を叫びながら、お客さんの袖や袂を掴んで、引張りました。それが二人も三人もいたので、そのお客さんは、転んでしまいましたが、幸い怪我はしていませんでしたが、だが怒って、車夫達を怒鳴りつけました。

車夫達は、車夫達で、俺が最初に声をかけたのに、後から、手を出したのは、お前だと、言いだし口喧嘩が始まり、どこからか手が出て、お客さんはそこに置きっぱなしで、そこにいた他の車夫達も加わり、大乱闘になってしまったのでした。

その頃は、どこの温泉でも、温泉に来るお客さんは、いまのように予約制度など、ない時代なので、何度も来て親しくなれば、お客さんが前もって、手紙を送って来ていましたが、ほとんどの人は、温泉町に入ってから、軒を連ねた、旅館の前で、客引きの番頭達と、話をして、今夜の宿を決めていました。

ここ湯ノ津では、旅館の軒先が駅に移動し、番頭が車夫に、変わったことだけの、違いでした

。大乱闘になってしまったので、駆けつけた警官に、加わったものはみんな警察署に、連れて行かれました。

雇主である、旅館の主人達も、呼び出されました。

そこで警察は、雇主達に向かって、

「お前達は、鉄道で来るお客さんを、案内するのを、車夫達だけに任せておくから、こんな事件が起こるんだ、これからは、組合から一人出して、喧嘩などしないように、車夫を指導するように。お客さんも、人力車も来て順番に乗せるようにすれば、こんな事件は起きないはずだ。」と、いわれ、雇主達も、車夫達も、頭を下げて、警察署を出ました。

これは、人力車夫は、人力車を曳いて、汽車の到着時間に合わせて、やって来ていました。汽車からおりて、温泉町に行くお客さんが、人力車の数より多いときは、少しはよかったのですが、

お客さんが、少ないと、お客さんの奪いあいになってしまっていたのでした。また、多い時は、乗れなくて、待たされている、お客さんを、もう一度運ぶための競争になり、残ったお客さんが少ない、二回目になると、やはり小競り合いをしていました。

こんなことが、みんな明るみに、出てしまったのでした。

また翌朝、お客さんが帰るときは、汽車の発車時間に合わせて、帰る人が多いので、大きい旅館では、人力車の数が足りず、近所の旅館の、人力車に応援を頼みましたが、このときは、どこも同じで、応援は断られることのほうが、多かったのです。

そのため、帰るお客さんが多い時は、一部のお客さんには、早く出発してもらい、駅で汽車が来るまで、長時間待ってもらうようなことで、なんとかやりくりを、していました。

旅館では、早立ちをしてもらう、お客さんを選び出し、説得するという、苦勞があったのでした。

組合では、これらの問題を、早く解決したかったのですが、なかなかよい意見が、出ませんでした。

ただ、警察にいわれた、ことだけは、すぐにでも、始めないと、いけないので、お客さんが到着する時間には、駅前に整理のために、一人だすことに決めました。

だが、この人選がなかなかまとまりませんでした。

旅館が、忙しくなり始めるときから、一人とられてしまうので、車夫に指示出来るような、シッカリした人は、どこも出せないのです。それと、駅前の人を出した旅館が、自分のところが、有利になるようなことを、するのではないかと、言いだす人もいました。やむなく、駅前の整理には、各旅館が順番に、人を出すことごとくにして、その順番だけを決めて、散会しました。

やはり、出て来たのは、どの旅館も、なにも出来ない、小僧さんでした。それでも車夫達は、この小僧さんを、からかいながら、今度騒動を起こしたら、仕事が無くなるので、なるべく騒動を起こさないように、おとなしくしていました。

ただ、お客さんの、多い日には、人力車が足りず、人力車が帰ってくるのを、待ってもらうため、そのお客さん達からの、苦情は無くなりませんでした。

といっても、お客さんを、待たせる日は、月に数日なので、人力車を増やしても、遊ばせる日のほうが、多いので、旅館としては、増やすことはできない、相談でした。

そこで、考えだされたのが、各旅館が出資して、人力車の会社を作ることでした。

本社を、旅館街に置いて、湯ノ津の駅前に出張所を作り、会社の幹部を常駐させて、汽車から降りて、人力車に乗るお客さんの、整理にあたらせることにしました。

すると、いままで、湯ノ津に住んでいても、あまり旅館に関係ない人達にとっては、人力車は利用しにくかったのですが、この人達も利用するようになりました。また駅前でも、湯ノ津に出来ないお客さん、例えば練兵場へ行く、陸軍省の人達や、その近くに住んでいる人達も、利用するなどで、会社の成績はだんだん、よくなりました。

湯ノ津の旅館でも、車夫達がしゃべったのか、練兵場に来た、陸軍省の軍人や、役人も来てくれるようになり、こちらも、少しずつ、よくなりました。

ただ、変わらないのは、お客さんが多いときに、お客さんに、人力車が来るまで、待ってもらうことでした。

だがお客さんのほうは、雨の日や、寒い日には、温泉町の本社と、駅前の出張所のそれぞれにある、待合室で待っててもらおうぐらいしか、変わったことは、ありませんでした。

だんだん 湯ノ津が、知れわたって来ると、お客さんも多くなり、各旅館にとっては、喜ばしいことでした。

だが、そのために、駅から、温泉町まで、そしてその帰りの、お客さんの、輸送が人力車だけなので、その力不足が、だんだんとハッキリして来ました。

だが、車夫を増やすことは困難でした。高齡になって止めて行く人達を、補充するだけで精一杯でした。

## 駅をつくろう

<http://p.booklog.jp/book/29257>

著者 : oerxx

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/oxdream/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/29257>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/29257>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.